

# マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 # 8 原作シナリオ

山崎浩治

## マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 # 8 原作シナリオ

---

### # 1 月の出ていない片町の夜空

#### # 2 「スナック香澄」店内

カウンターにアヤカ、吉岡、美鈴、あかり、陽平がいる。

あかりの前には、ご飯とみそ汁、漬け物。

陽平「せっかくの同伴だから会席料理やフレンチでもよかったのに……」

あかり「あたしはこれが一番好きなの。いただきます」

吉岡「あかりちゃんは毎日のように同伴してるから、高級料理は食べ飽きてんだな」

美鈴「(陽平に)サラリーマンのあなたに気を遣ってるのよ」

陽平「なんて優しいんだ、あかりちゃんは(と、うれし泣き)」

アヤカ「(そんなやりとりをニコニコしながら見つめて)……」

アヤカのM「あかりさんは、片町のシンデレラ、と呼ばれてる高級クラブの人気ホステスさん。

こう見えて男性なんです。そのことに、あかりさんにゾッコンの陽平さんは気付いていません……」

あかり「……アヤカちゃん、香澄ママはどうしたの」

吉岡「あかりちゃんは最近、常連になったから知らないのか」

アヤカ「香澄ママはたまに、月を見にこのビルの屋上に行くんですよ」

あかり「(怪訝)お月見をしに……？」

陽平「(同様に)今晚、満月だったっけ」

美鈴「今日は新月」

あかり「じゃ、お月様見えませんね……(首を傾げる)」

その時、ドアが開いて、誰かが入ってきた(足元にキャラクターが描かれた子供用のズックが見える)。

アヤカ「いらっしゃい……ませ？」

### # 3 ビルの屋上

夜空を見上げている香澄ママ。

香澄ママのM「……あの日も、こんな夜空だった」

寂しげな香澄ママの横顔。

### # 4 「スナック香澄」店内

店に戻ってくる香澄ママ。

香澄ママ「(カウンターの中に入って、客たちに)ごめんね、ちょっと外の風にあたってきたの……あれ？」

カウンターの真ん中に――背中にランドセルを背負った小学生くらいの男の子がちょこんと座

っている。

香澄ママ「(驚いて、アヤカに)どうしたの、この子……」

アヤカ「(困惑して)それが突然お店に入ってきて……」

吉岡「このボウズ、名前聞いても教えてくれないんだよ」

少年「(香澄ママをまっすぐ見つめて)……」

美鈴「お父さんがあんまり片町に入り浸るんで、お母さんに言われて迎えに来たんじゃないの？……本当は吉岡さんの息子だったりして」

吉岡「(焦って)オレは独身だ！ 隠し子もいないぞ！ 信じてくれ香澄！ ていうか美鈴、そろそろ出勤しろ！ いつまで油売ってんだ！」

少年「(大人たちの喧噪をよそに、知らん顔)……」

アヤカ「(香澄ママに)……こんな調子なんですよ」

香澄ママ「(少年に)ボク、年はいくつ？」

少年「(胸を張って)今度、小学生になるよ！」

アヤカ「初めてしゃべった！」

香澄ママ「お腹空いてない？ 何か食べたいものある？」

少年「(目を輝かせて)オムライス！」

香澄ママ「(微笑んで)いま作ってあげるね」

少年「(嬉しそうに香澄ママを見つめて)……」

香澄ママのM「あの子が生まれていたら、ちょうどこの子の年ごろになる」

## # 5 片町の裏通り(香澄ママの回想)

中年紳士に抱擁されているホステス時代の香澄ママ。

香澄ママのM「当時クラブに勤めていた私は愛してはいけない人を愛し、その人の子を宿してしまった。でも、あの人には妻子がいて、結婚することができなかった。本気の恋でも遊びとして別れられる……それがお水の女のプライド」

中年紳士の胸で涙を堪えている香澄ママ。

## # 6 レディースクリニックの表(香澄ママの回想)

クリニックの中に入っていく香澄ママ。

## # 7 その手術室・前

香澄ママのM「一人で子どもを育てていく自信のなかった私はあの子を……墮ろした」

## # 8 香澄ママのマンション(夜・香澄ママの回想)

ベランダに立ち、夜空を見ている香澄ママ。

香澄ママのM「手術を受けた日は、月が見えない新月の夜だった」

夜空に星が瞬いているが、月は浮かんでいない。

香澄ママのM「それはまるで、この世に生まれることのなかったあの子の命のように私には思えた」

香澄ママ、涙を流している。

香澄ママのM「私はあの子に`凜、と名付けた。男の子か女の子か分からない命だったから、男の子でも女の子でもよいように」

#### # 9 ビルの屋上(夜・香澄ママの回想)

香澄ママが夜空を見上げている。

香澄ママのM「あれから私は新月がめぐってくると、いつも夜空を眺めるようになった」

#### # 10 「スナック香澄」店内(現在)

少年がおいしそうにオムライスを食べている。

そんな少年を、目を細めて見つめている香澄ママ。

少年「(食べ終えて)……僕、帰る！(席を立てて店を出て行く)」

香澄ママ「ちょっと待って！(少年を追っていく)」

アヤカ「香澄ママ！(自分も追おうとするが)」

香澄ママ「アヤカちゃんはお店をお願い！(と店を出て行く)」

#### # 11 ビルの廊下

少年が背中のランドセルを揺らし、階段を駆け上っていく。

香澄ママ「そっちは屋上！ エレベーターは反対側よ！(と追う)」

#### # 11 ビルの屋上

息を切らせて上がってくる香澄ママ。

少年がニッコリ微笑んで待っている。

少年「僕のこと、ずっと覚えていてくれたんだね……お母さん」

香澄ママ「(目を見開いて)あなたは……凜なの？」

凜「僕、生まれてないから幽霊じゃないよ。だから怖がらなくてもいいからね」

香澄ママの瞳から涙があふれ出す。

香澄ママ「どこの世界に、自分の子どもを怖がる親がいるもんですか」

凜「お母さんは新月になると、お月様に祈ってくれたね……僕に一度だけ、会わせて下さい、って」

香澄ママ「それで会いに来てくれたの？ 小学生になるあなたを見せに……」

凜「お母さんの作ったオムライス、もっと食べたかったなあ……」

香澄ママ「(凜を抱きしめて)せっかく天が授けてくれた命なのに……あなたを産んであげられなくてごめんなさい」

月が浮かんでいない夜空に、流れ星が流れて消えた。

香澄ママ「(ふと気付くと)……」

凜の姿が消えている。

香澄ママ「(慟哭)……」

その姿を物陰から見守っているアヤカ。

# 1 2 片町の夜景

アヤカのM「新月に願い事をすると、願い事が叶うといひます。それは新月の夜に片町で起きた奇跡でした」